

赤く輝くナンテンで彩り豊かな「花と緑と鮎の町」を

父の跡を継いで30歳から農業を始めて、8年目を迎えた森田二三生さん。クジャクソウなどの花きを栽培している。20㍏の畑でナンテン栽培にも取り組む森田さんは、今年度の熊本県花き品評会におい

て、その自慢のナンテンで金賞と九州農政局長賞を受賞した。同品評会は、県産花きの生産技術の改善と品質の向上、消費の拡大につなげることを目的に、県花き協会が主催。



森田 二三生さん
Morita Fumio

〔船津区〕

もりた・ふみお / 花き生産農家。今年度に熊本県花き品評会に初めて応募。ナンテンを出品し、金賞と九州農政局長賞を受賞。

「良いナンテンは葉が大きく、1株にたくさん茂っている」といい、寒さと太陽の光が強ければ強いほど赤くなるという。自然の恵みを受けた赤色を出すため、日々努力を続ける森田さん。「ナンテンもクジャクソウも、『添え花』だから目立たない存在。でも、脇役がないと主役が引き立たないから重要。特にナンテンは、『難を転じる』の語呂合

わせでお正月には欠かせない縁起物だから、ぜひ買ってほしい」とその魅力を語る。受賞の感想を、「素直にうれしい」と話すものの、「農業は休みがなく、天候に左右されるため思い通りに作物が育たないなど、苦勞が多い。その苦勞に見合った収入がないから、後継者が育たない」と農業の未来に危機感を抱く。また近年では、外国産の輸入量増加に加え、不景気による需要の減少も花き農家には逆風になっている。ほかの農作物と違って嗜好（しこう）品である花きは、景気を示すバロメーターといえる。「若い人たちには、花を買うという習慣自体がない。それに加え、生け花をする人が減っているので、ナンテンの需要も減ってきている」という。「授業で生け花をする機会を増やすなど、学校教育に花を取り入れて、若い人たちに花を身近に感じてもらえれば、需要が増えるのではないかと」「花と緑と鮎の町」甲佐での、花に囲まれた潤いのある暮らしを提案した。

広報 こうさ

2013年（平成25年）1月号
通巻522号